
記憶の本

五本上尚文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶の本

【Nコード】

N7308C

【作者名】

五本上尚文

【あらすじ】

記憶のない、僕。僕を知っている、由宇。記憶、過去、愛……。記憶と言葉が紡ぎだす物語。

第1話（前書き）

初めまして、五本上尚文です。

この小説は故人の小説を使っています。僕自身、うまく使えているかは解りません。でも読んで頂けたら幸いです。

第1話

病院。

白い壁。

白い天井にある、黒い滲み。

田舎で車の音があまりしない。

病院。時間がとても遅く感じる。ましてや、18の僕にはまだ無縁だと思っていた場所。

いや、覚えてない。何故、僕には記憶がないのか？

何故、僕がこんな田舎にいるのかも・・・。

忘れてしまった。本当にすべて忘れてしまった。なにもかも・・・。

昼間はただ生きる。看護婦さんが運んできた不味い飯に文句を言わないで、黙々と食べる。機械のようにただ食べる。不味い飯が無くなると、今度は天井の黒い滲みを数える。一樣、看護婦さんと必要最低限の会話はする。でも、それだけ。

夜はよく泣く。多分、体は忘れてしまった記憶のことを思い、泣いている。僕にも忘れなくなかった記憶があったのだろう。頭は忘れて、分かんないのだけど、体は覚えていて、目から涙が止まらない。気が付いたら朝になって・・・そんな毎日。

自分が少し動いたら変わるかもしれない毎日。悪い方に変わるかも知れないけど、良い方にだって変わるかもしれないのに、僕はただ悪い方に変わるのが怖くて、何で生きているか解らないこの永遠のように感じる生活が続けるつもりだった。あの人があの本を持つてくるまでは……。

「入るよ」

僕の返答も聞かずにズカズカと僕の個人病室に乗り込んでくる。

「まったく……なんですか？」

「あつ。今、イヤそうな顔しただろ？せつかく美人でないすばでいな看護婦、綾香が来たと言っのに……」

美人？ないすばでい？って誰が？見たいな顔をしてみる。

「デメつ……」

綾香さんは青い血管を浮き立たせてすごく怖い顔をする。

さつきはぼけてみたが、実際、綾香さんはすごい美人で、まあ……結構なんと言っか、胸がある人でその……まあなんだそんな感じの人なんだ。

今でも鮮明に覚えている。綾香さんが初めて来た時のことを……。まず、顔を見て綺麗だと思った。これで済んでいたらどんなによかつただろうか？

これは男の性だ。顔だけじゃ済まない。当然のように次に胸を見てしまった。ぶっちゃけ、鼻血が出そうになった。僕の状態に気づいたのか、綾香さんが次に言ったのがヤバかった。

『私、Eカップだから』だった。

出会いの衝撃が大きすぎて綾香さんが男勝りな性格を知るまで、綾香さんを見ることも、話す事さえもできなかった。

「まあ・・・いいや。あのさ、この本を覚えてる？ マルタン・デュ・ガールの『チボー家の人々』って本なんだけど・・・」

気付くと綾香さんは一冊の本を振りながら尋ねてきた。

その本は凄くシンプルな黄色い本だった。だいぶ色褪せていることから、本当はもっと濃い黄色だったみたいだ。

「覚えてないです」

綾香さんは少しガツカリしたような顔をしたが、それもすぐに止めて口早にこう告げた。

「読んだきな。アンタの記憶が戻るかもしれないし、なにより、アンタの知り合いがアンタに読んで欲しがってるしね」

今まで、誰一人として僕の所に訪ねて来なかったのに、いきなりそんなことを言われても・・・。

「イヤですよ・・・」

綾香さんは本を丁寧に僕のベットに置き、やさしく読むんだよとだ

け言い残して、あの嵐のような登場とは違い、静かに去っていった。

僕は怖かった。だから綾香さんに嘘をついた。あの本を覚えていなかった訳じゃない。見たとたん、僕の中の何か暴れだした。これを読んだら、多分記憶が蘇る。しかし、何故か嫌な記憶しか蘇らない気がする。本当にそうなのかもしれないし、もしかしたら本当は嫌なことなんてなくてただ、ビビッてるだけかもしれない……。でも、今の僕にはとてもじゃないけど綾香さんが持つてきた『チボー家の人々』を読む気なんてなれなかった。気付けば、朝になっていた。凄まじい不安に襲われて寝ることなんて叶わなかった。綾香さんだったら、たかだか本、一冊で何してんだいって言われそうだけど僕は本気で悩んでいた。あの黄色い本は、僕に光を導く本なのか？それとも常闇に落とすための本なのか？

僕は『チボー家の人々』を手にとっていた。いや、読むためじゃない。綾香さんからこの本を渡されてからだいぶたった今日、僕は読まないことにした。記憶がなくなつて生きていける。変に記憶が戻っても、僕がつらいだけだ。だったら、いつその事、何の記憶がなくなまま生きて行った方がいい。僕は目の前にある記憶の鍵を壊すつもりだった。投げ捨てようとした。何度も、何度も……。

しかし、僕の手から黄色い本が地面に叩きつけられることはなかった。

感じてしまった。なんだかよく解らないけど、感じた。

温かさを……。

人の心のような儚い温かさを……。

簡単に壊れる温かさを・・・。

『トスッ』

力の抜けて、本はベッドの上に落ちた。目から涙が溢れて来た。

「ヒッ・・・」

立ったまま泣いてしまった。いつ以来だろうか？立ったまま泣きじやくるのは・・・。

記憶がない。また寂しくなった。どうしても涙が止まらない。どんな記憶でもいい。もう、すっからかんは嫌だ。記憶が欲しい。記憶が無くなってからの初めての決心だった。

第2話

「ウース、って何？その顔？腫れてるよ！」

また勝手に入ってきた人はやっぱり、綾香さんだった。なんかビツクリするほどに慌てているからいつもど通りの言葉をかけた。

「なんか用ですか？」

まだ、顔に泣いたときの涙のカケラが残っている。顔をガシガシ布団に擦りつけて、涙のカケラを強引に拭いた。綾香さんに泣いた顔を見られたくなかった。

「何？アンタ、泣いてたの？」

すでに見破られていた。

「な、泣いてなんかいませんよ！」

ちよつと怒り気味な口調になってしまった。

「ふーん、そつかそつか」

多分、完璧にバレた。悔しいが負けを認めるしかなかった。

「で・・・何のよう」

「いや、なにもないよ？」

「じゃあ、帰ってください」

「良いじゃない・・・少しぐらい」

「良くないです」

「ケチ」

そう言つて『イーだ』をしながらドアから出て行つた。多分、綾香さんを言い負かしたのは今日が初めてだった。大分、些細なことだけど、なんか嬉しい。

「アンタ、何にやけてんの？しかも立つたまま」

綾香さんが不審そうしながらドアから顔を出していた。帰つたと見せかけて実はドアの後ろに隠れると言う簡単な子供だまし。僕はあっさりと引つ掛かってしまったのだ。あまりにも子供っぽく、そして、可愛かつたので僕はとても怒れなかった。

「今度は笑ってるし・・・」

「いや、綾香さんにもなんか可愛いところ・・・あるんですね」

考えていたことがそのまま出てしまった。まったくの出し惜しみもなく・・・。だんだん、綾香さんの顔が赤くなる・・・あっ、耳まで真っ赤だ・・・。

「わ、私をからかうな」

コブシをブンブン振りながら怒っている。実際、その怒り方も可愛

いくて、もつと笑いそうになったけど、これ以上笑うと、自分の命が保障できない。ただでさえ、綾香さんが怒って、暴れそうなのにこれ以上怒らせると注射器や点滴台が飛んでくるだろう。さすがにそれはマズイ……。僕は頑張って笑うのを止めた。

「やつぱり……。なんか、用があるんですね？」

綾香さんは顔を赤くしたままうつむき、うつだか、あゝだかをぶつぶつ言っていた。

綾香さんが唸っている間に僕は黄色い本を手にとって眺めていた。

大体3分かその位だっただろう。その間に、本の背表紙に達筆に『篠宮宗助』と書いてあった。それは僕に病室の番号の下に書いてある苗字と一緒にだった。

「うつやつぱいいや。忘れて！」

そのままの勢いで綾香さんは出て行こうとした。それはもう、マラソンのランナーのように……。

「あ、綾香さん！ちょっと待って下さい！！」

綾香さんがドアの前で止まった。もう少し遅かったら綾香さんはあのまま行っていただろう。止まってくれて良かった。

「……もしかして……吾郎……惚れた？惚れちゃた？惚れちゃちゃ？ちゃちゃちゃちゃ？」

「……綾香さん……頭……大丈夫？」

まだ、『ちゃちゃちゃ』と連呼する綾香さんを馬鹿にするように言った。今は変な踊りまで付いている。ちゃちゃちゃと口で言っリズムと踊りは全然合ってなくて正直、キモい……。

「……じゃあ何の用よ……」

ムツとした顔で綾香さんが聞いた。つか、綾香さんは本気で僕が惚れていると思ったのだろうか？……だいぶ勘弁してほしい。

「この本って……誰のですか？」

第2話（後書き）

大分更新が遅れました。

今回は綾香さんが壊れましたね・・・w w

結構、遅筆ですが皆さん、最後まで付き合ってください。
あと、感想も待ってます！！

第3話（前書き）

感想をいただけたら幸いです。

第3話

「ああ、あの本ね・・・たしか・・・由宇って娘が持ってきたのよ。でも・・・凄い可愛い子だったわね」

由宇・・・聞いたことのない名前だ。でも、僕も知っている人なんだろう・・・。でも・・・思い出せない・・・。

「何、考え込んでいるのよ？・・・ちよつと！吾郎？」

「なあ・・・綾香さん、その由宇さんって人に会わせてくれないかな？」

綾香さんはちよつと考えて、そしてサラッと言った。

「私も言っただよ。でも、彼女、本だけを渡して下さいだつて。たぶん、アンタと逢いたくないのよ。鬱陶しいし・・・。」

「それは・・・綾香さんだけだと思つ・・・。」

「なんか言っただ？」

「なんにも・・・言っただですよ」

名前の覚えてない人に鬱陶しがられることは無いと思つし、なによりこんな本を置いていく方がどうかしている。こんなのを置いていく方が何かがあると思つのが普通なんじゃないかな？

「しかし、チボー家ってなんだよ・・・。」

「知らないの？チボー家？」

声の主は綾香さんだった。

「・・・まだ、居たんですか・・・って綾香さんはチボー家を知ってるんですか？」

綾香さんはホントに知っているらしい・・・満面の笑みでうなずいていた。しかし、以外だ。凄く、色褪せていることからして結構古い本だろうし、ペラペラとページを見ていると字が細かい上、二段組だった。こんなの絶対本好きじゃないと読まないよ。・・・本当に、以外だ。

「どんな本なんですか？」

ページを適当に読み飛ばしながら聞いた。てかこれ、48年前に絶版になってる・・・。ひつこいようだがマジ、以外だ。

「自分で読みな。アンタが今、持っているんだったら読んだほうがいい」

・・・綾香さんが言うのと本当にし妙な説得力があるのは何故だろう？

「・・・ケチ」

まあ、綾香さんが言うのも分かる・・・。感想を聞くよりも自分で読んだほうが何か分かるかもしれない・・・。関係あるならね・・・。僕はスツとベットから立った。

「ちょっと、何処行くの？吾郎」

「散歩だよ。さ・ん・ぽ」

なにかと心配性だな、綾香さんは・・・。

病室を出てちよつと行くと大きな木の下にベンチがある。僕が始めて散歩をした時に見つけたものだ。まあ、見つけるもなにも病院の裏庭にある普通のベンチだが僕は気に入ってる。

まず、人がこない。これは何かしら人がくる病院ではまず、一人になることが少ない。人が多いのをあまり好きとしない僕にはありがたい場所だ。

もう一つは・・・なんだろう？ここが僕と似ているからだろうか？ここにくるとすごく落ち着く。

僕は考えながらベンチに座った。

「あ、あの～隣り、いいですか？」

声を懸けられて初めて気が付いた。僕はそんなに考え込んでいたんだろうか？全然気付かなかったぞ？彼女は『えへ』っと笑いながらヤンワリと聞いてきた。

「・・・ダメですか？」

「いえ、どうぞ・・・」

「えへ・・・ありがとうございます」

・・・観た感じ、僕の同い年か年下だった。だいぶボツーとしてるし、入院患者だったら普通パジャマ着てると思うし・・・と言うことはお見舞いかな？でもここって人があんまり来ないしな・・・。なんなんだろう・・・？

「・・・やっぱり、・・・ないんだ。」

「え・・・。」

「いえ・・・なんでもないです」

彼女が大事なことを言った気がした。

「えへ・・・ここ、綺麗ですね。」

「え？・・・ええ、ここって僕のお気に入りなんです。てか、ここしか好きになれないんです」

「え？・・・なんでですか？」

「あ・・・なんででしょうねえ・・・でも、大切だから・・・？」

僕は話しながら考えた。なんでこんな身の上話をしているのだろう？・・・と。まだ、逢ったばかりなのに・・・と。

でも、彼女がとても大切に思えた。

第3話（後書き）

次は早く出すつもりです

第4話（前書き）

遅くなりました！
待っていてくれた人、ありがとうございます！

第4話

「あの・・・どっかでお会いしませんでしたっけ？」

僕はたまらず聞いてしまった。絶対逢ったことがある。こんなに心が震えているのに・・・何も思い出せない自分が不甲斐無かった。

「・・・え？」

「・・・ヤッパリいいです」

自分の勘違いだと恥ずかしいから聞こえていないならいいや・・・。

「気になりますよ」

「いや・・・名前聞いたかな？って・・・」

とつさに言い訳を考えた。我ながら・・・この質問ないよな・・・。

「？。名前ですか？」

「・・・はい」

「・・・です・・・」

「へ・・・？」

「・・・由宇です・・・」

・・・？。由宇・・・？こないだ、綾香さんが言ってたのは・・・
由宇。『チボー家の人々』を僕に貸してくれたのは・・・由宇。今、
僕の目の前にいるのは由宇。

「！！由宇！？」

僕の脳が一気に覚醒した。

「はッハイ！！」

「ちよつと・・・まって、君が・・・由宇？」

「はい・・・私が由宇です」

「・・・そうなんだ」

この子が由宇。僕の記憶の鍵を持つ女の子。どっちの転ぶかはまだ、
解らない。良い方に転ぶか、悪い方に転ぶか・・・。

「君は僕のことを知ってるの？」

「はい・・・。あなたは？」

聞き返された。当然、知らない。てか、記憶喪失だから大体のことは忘れてしまってる。

「ごめん。覚えてない・・・」

僕は正直に言った。それしかなかったから・・・。

「そう・・・ですか・・・。残念です。」

由宇と名乗った少女の本当に、本当に残念そうに言った。そして、彼女の瞳から涙がこぼれた。何の偽りも無い、涙が・・・。

「僕って、君にとって大切な存在？」

彼女は『秘密です』と言って笑っていた。いい女には秘密が必要なんですよ？なんてことを言いながら、泣いていた。

僕は、無力だった。

第4話（後書き）

読んで頂けてありがとうございます。できたら、感想なども書いてくれると嬉しいです。

次回も、遅くなると思います。でわでわ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7308c/>

記憶の本

2010年10月15日23時13分発行